

伊勢原市の桂川家墓地

将軍の代々侍医

Key

[9代の業績 解体新書 ポタニクス]

ガイド

伊勢原市上粕谷875
日蓮宗富士山 上行寺
小田急線伊勢原駅下車、バス大山ケーブル駅行
山王中学前下車 5分

伊勢原市下粕谷143
東海大学病院の西北 2 km



伊勢原市上粕谷、太田道灌の墓の近くに上行寺(じょうぎょうじ)がある。この寺には江戸時代後期、初代から7代まで150年間代々将軍の侍医であった桂川一家の墓がある。桂川一家は蘭学界の名門中の名門であり、代々外科医として最高の法眼の地位にあり、蘭学圧迫時代にも例外として蘭書を読むことが許可されていた。

門を入った正面左手に桂川一家の墓がある。墓に向かって左側が桂川家累代の碑である。初代から9代までの業績が簡単に記されている。右側の大石碑には4代甫周の業績がやや詳しく記され、後方14基の墓碑には歴代の戒名が刻まれている。

7代の中でも、3代桂川甫三・国訓は青木昆陽について蘭学を学び、杉田玄白、前野良沢らと友人であった。4代桂川甫周・国瑞は

月地と号し『解体新書』の翻訳に参加、チュンベリーについて外科学を学んだ。6代桂川甫賢・国寧は優れた蘭学者であり、蘭館長ズーフからポタニクス(植物学者)と名づけられシーボルトとも親しく交際した。7代桂川甫周・国興に蘭館長ズーフはいわゆる「ズーフ・ハルマ」を編集させ20年後に完成した。しかし幕府はこれの普及を許可しなかった。そのため周甫らはズーフ・ハルマを改定し、『和蘭字彙』を作り後世に伝えた。

この寺は1567年小田原に富士山上行寺として創設されたのが最初であるが、のちに江戸東京に移転した。1962年(昭和37)俳人室井其角、将棋名人で将棋の駒を象った大橋家の墓碑と共に東京三田の二本榎から当伊勢原市に安住の地を求めた。そんなわけで上行寺の入り口には「史跡 桂川甫周の墓」と記した二メートルほどの石柱が建っているが、裏に「東京都指定」と書かれているのはこうした理由によるためであろう。

東洋文庫の『名ごりの夢』の著者今泉みねは7代桂川甫周の娘で、その息子が今泉源吉で、篠崎書林発行蘭学の家『桂川の人々』3巻の著者である。『名ごりの夢』には明治の最高の文化人が語るサロンの様子がいきいきと描かれている。〔大滝紀雄〕

権田直助

阿夫利神社の神宮

key

[皇国医学 国粹主義 大山]

ガイド

伊勢原市大山355 阿夫利神社

小田急線伊勢原駅下車、バス大山ケーブル駅行
終点下車60分



江戸末期から明治の初期にかけて、わが国の医学は各派がひしめき、多彩そのものであった。漢方医が大部分を占めていたが、その中にも種々の流派があった。吉益東洞を社とする古方派は『傷寒論』を尊ぶ態度を持したが、同じ古方派であっても山脇東洋に始まる一派は解剖等を重視し、蘭学をとりいれた実証的態度を示した。

古方派に対し後世派といわれる一派は儒者と医者を兼ねたものが多く、時代の進むにつれて、折衷的ないし考証的色彩が濃くなってゆく。一方杉田玄白らの蘭学に発した西洋医学は、ますます科学的実用性を深め、明治の西洋式日本医学を築く決定打となった。

こうした中であって、明治前国学の隆盛に伴って生じた医界の反効的現象の一端として、和方派という一派が生じたが、その最後の活

躍をしたのが権田直助(ごんだなおすけ)である。和方派は伝統を残さず直助とともにうたかたの如く消え去ったが、皇国医学を鼓吹した点では一種独特な存在であった。

直助は文化6年(1809)現在の埼玉県下呂町に漢方医の子として生まれた。

19才で江戸に出て、道三流儒医の家僕となった彼は、3年後に帰郷し開業したときは、門前市をなしたといわれる。

29才で再び江戸に出て、平田篤胤に入門した。篤胤は医学を修めると同時に国学を学んだ純国粹主義者であり、尊王思想の権化であった。医学に対しても皇国医学を説き、大國生命、少彦命名を医祖とするものであった。

直助は篤胤の学風に感化され、尊王倒幕の思想はますます強くなり、ついに「人の病は国の病より小さい。吾はまづ大なるものを治療しなければならぬ」という信念に変わった。

彼は文久2年(1862)上洛して志士の群に入り、西郷隆盛ら薩摩の過激派と親しくして国事に奔走した。また明治を迎えた日本の医学に皇国医学を据えようとしたが、国事犯の嫌疑を受け、約1年間幽閉生活を送った。

明治6年(1873)大山阿夫利神社の神官に迎えられた彼は、国学も医学も捨てて神道界のために盡し、79才で死亡した。かれの銅像は阿夫利神社下社前右側にある。〔杉田暉道〕

日本最古の売薬

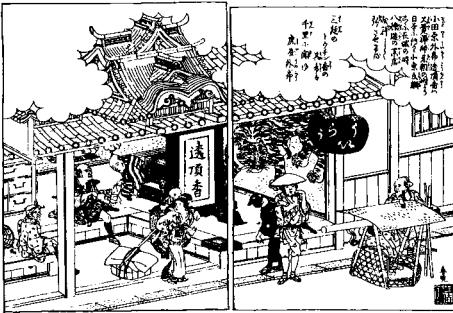
小田原の“ういろう”

key

[透頂香 最古の売薬 団十郎]

ガイド

JR小田原駅南口下車、箱根方面行バス、箱根口下車



小田原の本町一丁目で東海道の箱根口信号
 に向かって右側に外郎(ういろう)家があり、日
 本最古の売薬と伝えられる“ういろう”を販売
 している。家伝によれば、明の「靈宝丹」を初
 代が伝来し、後小松天皇に献上したところ誠
 に良い薬だとのおほめのお言葉をいただき
 「透頂香」という薬手までいただいた。これが
 後に“ういろう”と変って今日に及んでいる。

外郎家ではこの薬を市川団十郎の舞台にの
 せ、団十郎に宣伝させて忽ち全国に知れわた
 るという放れ業をやった。しかし“ういろう”
 の成分については余り知られていない。

〔千粒中の成分〕

麝香 0.037g、桂皮 0.561g、丁香 0.937g、
 莢撥 0.187g、甘草 0.937g、竜腦 1.875g、
 人參 0.937g、蓮砂 0.562g、薄荷腦 0.187g、
 阿仙 20.625g、縮砂 1.031g。

渡辺 武薬学博士に従ってレーダーグラフ
 を作ると、気と温を極とした三日月型となり
 (裏表紙)伊勢国朝熊山(内宮うら山)の万金
 丹のグラフに近似している。英文能書にあげ
 られた適応は、胃痛、頭痛、めまい、気うつ、
 食中毒、嘔気、下痢、心気亢進、湿った咳、日
 射病、船酔い、その他突然の病いとなっている。

外郎家の祖先の問題、京都外郎家との関係、
 伊豆韮山の江川担庵をめぐる課題について興
 味をお持ちの方は、最近、杉山 茂薬学博士が
 『日本最古の売薬、外郎・透頂香、薬の社会
 史』を近代文芸社から刊行されたので一読さ
 れたい。 [中西淳朗]



松本順と大磯

初代陸軍軍医総監

Key

[大磯の恩人 海水浴 余技ダルマ]

ガイド

鳴立庵...中郡大磯町大磯1289
妙大寺...大磯駅より山側5分
照ヶ崎海岸...駅より約20分



松本順は順天堂の祖、佐藤泰然の次男として生まれたが、松本良甫の養子となった。彼は佐藤尚中とともに長崎でポンペに西洋医学を学んだのち、初代陸軍軍医総監に任命された。また男爵の榮譽を受け、明治18年には大磯を海水浴の最適地として推奨した。順みずから晩年の十五年を大磯に住んだ。こうした関係で、鳴立庵(しぎたつあん)、妙大寺、および照ヶ崎海岸の三か所に順の墓石と碑が建っている。

鳴立庵はJR大磯駅下車、海岸側へ徒歩数分で第一国道に出る。国道沿いに大磯町役場がある。その隣が有名な鳴立庵で、京都の落柿舎、滋賀の無名庵と並んで日本三大俳句道場として知られ、芭蕉や西行法師の句碑で有名だ。松本順の碑は観音堂のそばにあり、直径1メートル以上もある坊主型の墓石である。そこ

には彼の筆になる「守」の一字が刻まれている。

妙大寺は鳴立庵の反対側、大磯駅のすぐ裏手にある。「松本順先生の墓所」と記された妙大寺の門柱の石段を上った所に「勲一等男爵松本順の墓」正三位勲一等林董(ただす)書の立派な墓がある。董は順の実弟で駐英大使、外務大臣を勤めた人である。右手に灯籠、左手に「守」の文字を刻んだ石は鳴立庵のものと同じだが、こちらは分骨のため、規模が一回り小さい。

照ヶ崎海岸には1885年松本によって開発された大磯海水浴場を記念する6メートルにも及ぶかと思われるオベリスク型の「松本先生謝恩碑」が建っている。正面の文字は犬養木堂、裏面は鈴木梅四郎である。すぐそばを西湘バイパスが通っている。

大磯では現在でもなお松本を町の発展に貢献した恩人と感謝している。〔大滝紀雄〕



診療と研究に一世紀

杏雲堂平塚病院略史

Key

[医学者院長 災害克復 一般病院化]

ガイド

JR平塚駅下車、南口より循環バスにて杏雲堂前下車



東京・駿河台の杏雲堂病院は佐々木東洋が創立した。嗣子なく従兄弟の12才年下の政吉氏を養子とした。その政吉にも嗣子なく親戚筋の隆興を養子とした。初代は東京帝大の病院長を務めた教授、二代目政吉はベルツのあとの診断学教授で、三代目隆興は京都帝大内科教授で「オルト・アミドアツオトルオール^(註)」の経口的投与による肝臓癌の実験的研究」によって文化勲章を授与されている。戦争中、「吉田肉腫」を杏雲堂が一時預かった関係で、後に吉田富三氏は佐々木研究所の第二代会長となり（初代は隆興）吉田にも文化勲章が授与されている。

この様に一個人病院から三名の帝大教授を出していることも珍しいし、病院付属の形で出発した研究所から二人の文化勲章受章者を出した点も稀有のことである。

この杏雲堂病院が設立されたのは明治14年

である。同25年に同じ駿河台に高田畊安が東洋内科医院を開院、同じ年杏雲堂は平塚に分院(結核療養所)を設立し、同31年に畊安は茅が崎に南湖院の設立を決定し物議をかもす。一年後、佐々木東洋と高田畊安との応酬は表面化するに至った。

平塚の分院は昭和17年財団法人佐々木研究所に寄付され、研究所付属杏雲堂療養所となるも、20年7月の空襲で焼失し外来診療のみとなる。25年に再び結核の診療所となったが、その後の疾病構造の変化に伴い昭和34年に再び杏雲堂分院と改名し、外科、循環器科、胃腸科を新設して一般病院への転換を行った。現在の名称は杏雲堂平塚病院である。

ある先輩の話。“隆興先生から釣竿をいただけたら一人前の印だ”。〔中西淳郎〕

(註): バターの黄色々素の一種



東洋一を誇るサナトリウム

高田畊安と南湖院

key. [高田畊安 肺結核 転地療養]

ガイド JR茅ヶ崎駅下車、北口より浜見平団地行バスにて団地中央で下車、海岸の松林に向って徒歩5分。
(注意：南口はバスの運行が少ない)



いまから20年以上前の、昭和52年に『南湖院と高田畊安』という本が中央公論美術出版からでた。茅ヶ崎の医師・川原利也氏が書いた。その刊行によせて作家の城山三郎氏は、「南湖院というふしぎな建物、畊安というふしぎな人物を追って、ふしぎな旅がはじまる」と語っている。それは並はずれのキリスト教徒の話だ。

高田畊安は京都生れで、京都府立医学校在学中に洗礼をうけ、上京して東京帝大医学部へ入学、明治22年卒業した。日本医史学の泰斗・藤浪鑑より7年先輩に当る。畊安は早速ベルツ内科に入門したという。3年後、勝海舟の外孫・疋田輝子と結婚。明治27年。香港にペストが流行し、青山胤通教授が派遣され研究中に感染した。この青山教授の慰問使に高田は選ばれ現地に急行。無事任務をはたし二ヶ月後帰国した。翌年、激務のため肺結核

を発症。ベルツ、青山両教授のすすめで大磯に転地療養した。何んと一週間の海水浴で熱も痰も咳も消失し、畊安は「汝の信仰、汝を癒せり」の聖なる言葉をますます信じたのである。

湘南、西湘の海岸の新鮮な空気に魅せられた彼は、同32年茅ヶ崎村南湖(なんご)にサナトリウム南湖(なんご)院を開き信仰を深めつつ診療に精励した。昭和20年2月9日昇天。翌年、病院は進駐軍に接收され、松林の中の16万平米の敷地をもちベッド数300余床の東洋一サナトリウムは消えていった。

ここで治療をうけた文人に国木田独歩、八木重吉、坪田譲次、吉井勇、前田夕暮、平塚雷鳥らがあげられる。いまその跡地には県立西浜高校、診療所付老人マンションが建っている。
〔中西淳朗〕



旧南湖院附近図
印 団地中央バス停
印 旧南湖院入口

藤沢の種痘

神奈川の最初の種痘？

Key

[宮前の御霊神社 疱瘡神の社 小川孝栄]

ガイド

藤沢市宮前 御霊神社

JR藤沢駅下車、江の電バス大船行古館橋下車15分



藤沢駅から来ると藤沢病院の少し先に、村岡・大庭地域を拓いた村岡権五郎景正さらに葛原親王・高見王・高望王を加えた計5座を祭神とする御霊(ごれい)神社がある。この境内の左側にある白木の社に疱瘡神が鎮座する。この神様は天然痘を治すと厚く信仰されていた。土地の人はこの神様を別名湯婆神様と呼び、子供の無事生長を祈る神様としてもあがめられている。

このように疱瘡を治療するのにただ神仏にすがるだけの時代から西洋医学の発達によって疱瘡を予防するための種痘が発明され、藤沢では安政2年(1855)初めて行われた。この種痘の実施は神奈川県では藤沢が最初ではないかと思われる。

『藤沢医史』によれば安政2年の「御用留」に、「牛痘接種は江戸ではすでに行なわれてい

るが、この村では疱瘡が流行しても小児の有る者は特別唯悲歎にくれているだけであった。今度お上のお恵で御詮議の上種痘を行う。医師中村貫二其他の者にもその様に仰付けてあるから名主の所へ行って指定の日に皆さそい合せて種痘を受けなさい」とある。しかし、お上の御恵として始めた種痘は、思いのほか評判が悪く、接種する者が少なかった。

明治時代になると、政府は種痘の必要性を説いて、しばしば種痘接種者の調査を行うよう通達を出した。

明治4年(1871)9月、藤沢宿の小川孝栄が官許を得て自宅で種痘を行なうという通達が出されている。このように種痘接種を受け易いように政府は努力したのであるが、依然として希望者は少なかった。

幕府時代の種痘は、痘科という一種の専門医によって行なわれたが、明治時代になると免許を既得した医家の処で習得した後、所管の地方庁で免許証を取得した種痘医が行うようになった。

小川孝栄もこの方式で種痘医となったのである。彼は小川泰堂のあとを継いだ第3代孝栄で、宿場の医師の中の中心的人物であった。明治初期に藤沢医学講習所を開いて医学の研修を行った。明治37年(1904)没。

(杉田暉道)

大船にみられる 「ヒポクラテスの樹」 大船中央病院の樹

key. [西洋医学の父 医の論理 コス島]

ガイド

鎌倉市大船6-2-24 大船中央病院
JR大船駅下車東口より10分



ヒポクラテス(紀元前460 - 375ころ)はエーゲ海のコス島で生まれ、西洋医学の父と呼ばれる。医学を呪術や迷信から離して、自然観察などの合理的な方法で捉えようとした。彼の治療法の中心は食事と、細かな配慮に基づく養生法にあった。養生法に注意を怠らなければ、誰もが持っている自然治癒力が発動して病気は回復に向かうと考えた。さらに彼の偉大さは、倫理思想を医学の分野に導入したことである。すなわち医のあり方、医師の使命について人間的な立場を樹立したことにある。これが「ヒポクラスの誓い」といわれるもので医道精神の基礎となっている。

そしてヒポクラテスの名前を愛称にした樹木がある。これがいわゆる「ヒポクラテスの木」である。この木は学名を *Platanus Orientalis* といい、ギリシャ等欧州の中近東地方に見ら

れる種類で、その実が2つづつ連なって結実し、また、葉の切れ込みも多少深いのが特徴である。山形市篠田総合病院の篠田秀男氏によると日本で普通見られるのは学名を *Platanus Occidentalis* といい、実が1つづつ結び、葉の切れこみが少々浅いので区別される、という。この篠田秀男氏が日本に最初に「ヒポクラテスの木」を渡来させた人物なのである。

大船中央病院の「ヒポクラテスの木」は日本赤十字医療センターの元院長・小林隆氏が「日本赤十字社創立百周年」を記念して「ヒポクラテスの木」を植樹しようと考え、ギリシャ赤十字社にその苗木を送ってほしいと依頼した。その結果、苗木24本と沢山の種子が送られてきた。この中の1本の苗木が日本赤十字本社に植樹され、この木がさらに大船中央病院に株分けされたのである。樹は数メートルの高さに成長している。樹の前には石碑があり、ヒポクラテスの木の由来と、ヒポクラテス箴言として名高い「生命はみじかい、技術はながい、機会は去りやすい、経験はだまされやすい、判断はむずかしい」の語がギリシャ語と日本語で彫刻してある。

もう1つは川崎市宮前区の聖マリアンナ医科大学本館前に植えられている。

〔杉田暉道〕

称名寺と今泉山静養所

神奈川県初の精神病患者救護収容所

Key

[浄土宗 仏教主義 環境的自然療法]

ガイド

鎌倉市今泉4-5 称名寺

JR大船駅下車、東口よりバス鎌倉湖畔循環今泉不動下車



バス停今泉不動で降りて、まっすぐ今泉清掃工場のわきを上ると称名寺(浄土宗)がある。この寺は貞享元年、武蔵深川の直誉蓮入がこの地を訪れ、不動堂や阿弥陀堂を建立したのを基礎にして、今日の寺院に拡張された。本堂には阿弥陀3尊を中心に25菩薩が雲に乗ってやって来る聖衆来迎像が安置されており、柱や内陣の装飾も美しい。

さて今泉山静養所は、住職成実随翁が、18世紀後半に活躍したフランスのフィリップ・ピネル(1745 - 1826)の業績に共感して称名寺の中に大正4年(1915)設立した施設である。ピネルはパリ近郊のピセートル療養院で患者を鉄鎖から解放するという革新的な人道的処遇を初めて実行し、近代精神医学の基礎を作

った人といわれている。随翁は称名寺は幽静な経路と清浄な溪流が交錯する寂境遇の中にあり、さらに滝を有するので、精神病患者を解放的に治療するにはもっとも適していると考えたのである。

嫡子の成実一雄が実務運営を担当し、一般精神病患者や警察署保護が必要と認められた貧困精神病患者を慈善的に救護収容した。そして環境的自然療法を行い、親戚や患者の責任者の希望により水治療法を行った。

敷地は寺院境内地、1,430坪、建物は、本館、別館、附属建物3棟、計5棟であり、その他事務所、教化道場、娯楽慰安室、運動場、演芸場があった。

主な入所者は、住職が説教して歩いた関東一円から頼まれた人たちで、浮浪者、売春婦、精神分裂病患者、躁うつ病者などの患者であった。

しかし時代が進むに従って精神病的概念が変わり、患者が精神病院で治療を受けるようになると、入所者は減り昭和47年(1973)8月最後の1人が港北病院に入院した。

入所した患者数は、創立以来昭和15年(1941)までの25年間に延べ99,458人(男49,618人、女49,840人)全治者626人、死亡または行方不明30人であった。

〔杉田暉道〕

長與専齋と鎌倉

松香長與先生紀功之碑

key

[初の結核療養所「衛生」の発明者 適塾塾頭]

ガイド

江ノ電長谷駅下車10分



鎌倉長谷の大仏は誰でも知っているが、境内に入ったすぐ左手に長與専齋の大石碑が建っているのを知る人はほとんどない。

「松香長與先生紀功之碑」は4メートルもあるのか。表題は篆書で書かれ撰文は土肥慶蔵、文字は一高教授菅虎雄となっている。鎌倉に町制が敷かれて二十五周年に当たる大正八年清川病院の先代院長清川来吉町長を中心に建てられたものである。長與専齋の経歴と業績、ことに鎌倉との深い関係を碑は語っている。

長與専齋(1838 - 1902)は我が国衛生行政の生みの親で、医療行政制度を確立し不動の位置を築いた人である。初代衛生局長を十八年にわたって勤めた。専齋と鎌倉との関係は極めて深く、衛生学的見地から由比ヶ浜を海水浴場の最適地であるという折り紙をつけたのは松本順より一年早い1884年であった。

碑文を読んでいくと、彼が鎌倉を愛し、横浜医師会創設期のころの医師近藤良薫や実業家茂木惣兵衛等と相談して、由比ヶ浜に「海浜院」という我が国最初の結核療養所を創設したのも明治20年長與であることが知れる。ここで一言注意しておきたいのは、一般の成書では最初の結核療養所は明治22年兵庫県須磨裏病院が最初であると書かれているが、実際はそれより2年早い鎌倉である。海浜院はその後海浜ホテルに変身しやがて消滅する運命を辿るのである。

長與碑の拓本を入手したくて大仏裏の店で聞いたが、これに関する文献は皆無とのことであった。私はその全文を拙著『かながわの医療史探訪』に記載しておいたので、参照されたい。 [大滝紀雄]

栄西と寿福寺

本格的な喫茶の始まり

Key

[『喫茶養生記』 禅宗 鎌倉五山の第三位]

ガイド

鎌倉市扇が谷1-17-7 寿福寺

JR鎌倉駅西口下車10分



栄西(1141~1215)は備中国(岡山県)に生れ19才で比叡山の有弁に天台宗を学んだ。仁安3年(1168)宋に渡り約半年間天台宗を勉強した。それから20年後の文治3年(1187)から4年間再び宋に渡り、今度は禅宗主として臨済宗と茶を学んできた。

帰国後京都に赴き、臨済宗を広めようとしたが、京都では新しい宗教を開くことは困難であることを知り、たまたま源頼家の招きを受けて新開地である鎌倉へ下った。彼が59才の時であった。

正治2年(1200)源頼朝夫人政子の祈願によって、源義朝の邸跡に臨済宗の寺として金剛寿福寺を開山した。その後次第に寺院の施設が完備し、元享3年(1323)の北条貞時13回忌供養では、建長寺・円覚寺に次ぐ260人の僧侶が加わり、鎌倉五山の第3位にふさわしい

寺の規模であった。

山門前から左の小道を上ると、現在通行止めになって立入禁止の所に明治時代の外相陸奥宗光の墓がある。回り道をして墓地に入ると、源実朝の墓と伝える鎌倉末期の五輪塔およびそのそばに北条政子の墓と云われる鎌倉末期の五輪塔がある。

さて、本格的に喫茶の習慣が始まったのは栄西以降である。栄西の著わした『喫茶養生記』には初治本(承元5年、1211)と再治本(建保2年、1214)がある。後鳥羽上皇の命を受けて献上したのが初治本であり、源宗朝が二日酔になった時茶と共に献上した『茶の徳を褒める書』が『喫茶養生記』再治本とされている。『喫茶養生記』は上下で2巻からなり、上巻は茶、下巻は桑のことが記されている。

初治本・再治本の最も大きな差異は、前者は上皇の仰せによって記したものであり、再治本は一般民衆のために記されているということである。

栄西は茶を養生の仙薬・延齢の妙薬であるとし、桑は万病を治す霊薬であり、桑の樹を念珠とし、杖・枕として身につけておれば天魔が近寄らないと信じ、これを『喫茶養生記』に記述した。〔杉田暉道〕

忍性と極楽寺

鎌倉時代の一大医療センター

key

[塔は4月8日だけ 昔は今の十倍以上 社会事業も]

ガイド

鎌倉市極楽寺3-6

江ノ電極楽寺駅下車5分



江の電極楽寺駅を下りるとすぐそばに極楽寺がある。極楽寺の裏手が稲村ヶ崎小学校に続き、校庭の裏山には関東では珍しい高さ3.5メートルに及ぶ二基の重文五輪塔が建っている。一基は忍性塔に違いないが、他の一基は2代忍公塔とされている。その他いくつかの宝篋院塔が見られる。以前には簡単にいつでも塔の見学ができたが、現在では一年中で4月8日一日だけしか公開入場が出来なくなった。

いまでこそ規模の小さい極楽寺だが、最盛期には七堂伽藍と四十九の塔頭が存在した大寺院というよりも大規模な医療センターであった。「極楽寺伽藍図」が保存されているがそれを見ると、孤児院、養老院、無料診療所、癩病院のほか馬病舎までが付属していた。さらに長谷の桑ヶ谷には分院と考えられる療養所までがあった。真言律宗極楽寺開設の時期については1267年説ほか種々あるが、いずれに

しても13世紀中期であったことには間違いない。極楽寺の開設者は叡尊の高良良観房忍性(1217-1303)であった。彼は鎌倉へ来る前、奈良の北方に北山十八間戸という現存している日本最古の癩療養所を作った。関西での経験を生かして、鎌倉では、医療と社会事業に十二分の腕を発揮したのである。

昭和55年稲村ヶ崎小学校校庭を発掘調査したところ、ここに華嚴院跡の礎石が証明され、この地が極楽寺の中心であることが知れた。現在では昔を偲ぶものはほとんど何も残っていないが、本堂前の大きな「千服茶臼」と「製薬鉢」は無言で古の存在を誇っている。

[大滝紀雄]



コッホ記念碑

結核菌とコレラ菌の発見者

key

[鎌倉医師会の快挙 富士山のとりこ 師弟愛]

ガイド

稲村ヶ崎公園内

江ノ電稲村が崎駅下車15分



結核菌とコレラ菌の発見者として有名なコッホRobert Koch(1843 - 1910)夫妻は、高弟北里柴三郎の招待によって1908年(明治41)夏2か月半、日本に滞在した。当時の日本は結核とコレラが大流行していたため、コッホは熱烈な歓迎を受けた。彼のスケジュールは招待晩餐会、「睡眠病について」の講演、宮中に参内、両陛下に拝謁、歌舞伎観劇、伝染病研究所見学、関西旅行等多忙であった。

この間彼はしばしば稲村が崎を見下ろせる霊仙山を訪れた。毎回北里が案内役を務めた。

当時は極楽寺の横から山頂に上る道があったらしい。コッホは霊仙山山上に上り、いすに腰掛けて眺める富士の景色が強く彼の印象に焼きついたようで、碑文を読むとそれが良く分かる。

コッホは帰国2年後、バーデン・バーデンで死去した。更にその2年後の1912年霊仙山上に高さ2メートルのコッホを忍ぶ碑が関係者の手で建てられた。関東大震災で倒れたが復旧された。太平洋戦争終了後、山への道は自然に閉ざされ、訪れる人もほとんどなく、コッホ碑も世間から忘れ去られた。

1982年結核菌発見百年を記念して、山上の碑を人々の目に触れやすい稲村が崎公園に移設する計画が鎌倉市と鎌倉市医師会によって提唱された。大型ヘリコプターを使って約2トンの碑も翌年の昭和58年11月同公園のやや奥の見晴らしの良い所へ建てられた。天気の良い日には富士を望むことができ、コッホの思いに浸ることができる。大正元年九月と書かれた碑にはコッホ来日が明治四十二年と書いてあるが、四十一年の誤りである。

[大滝紀雄]

鍼術師杉山検校

管鍼術を考案

key

[江の島 鍼術医 5代將軍綱吉の宿病を治愈]

ガイド

藤沢市江の島2-3-8

小田急線片瀬江の島駅または江ノ電江ノ島駅下車15分、湘南モノレール湘南江ノ島駅下車20分



対岸の片瀬の参道を通って大橋をわたり、まっすぐ進むと江島神社最初の青銅の大鳥居に達する。そこをくぐって、狭い坂道を登ると、辺津宮(一名下の宮)のある朱塗の大鳥居前に出る。裸弁天はさらに石段を登ったところにある新築の泰安殿に祀られている。大鳥居の左手すぐのところに江の島ご自慢のエスカー乗り場がある。エスカーと反対の右手の坂を少し登った崖の下に、ひっそりと杉山検校の墓がある。高さ2メートルに及ぶこの墓石は笠塔婆型で、元禄7年、門人三島安一によって建てられた。

徳川初期の鍼術医、杉山和一(わいち)

(1610? - 1694)は伊勢の国に生まれた。和一是幼いころ失明し、家督を義弟重之に譲り、江戸へ出て鍼術の師、山背琢一に学んだ。ところが彼の才能は認められず、破門の運命となった。このため彼は大いに発奮し京都に修行に出かけた。その途中、江の島弁天に詣で、断食すること7日間(一説では21日間)満願の夜の夢枕に管鍼を授けられ、これによって杉山流管鍼術を考案したといわれる。

元来鍼術は中国から日本に輸入されたもので古くは9鍼の法があった。この時代は中国伝来の撚鍼、御園流の打鍼、それと杉山流管鍼術が行われた。

和一は京都においては、入江豊明に鍼術を学んだ。そして山瀬、入江両師の長所をとり入れ、種々の工夫を凝らしたので、鍼術の技術は大いにあがり、杉山流として天下に鳴り響いた。貞享2年(1685)5代將軍綱吉の宿病を和一は鍼術で治癒させたため、自銀50枚と禄500石を賜った。元禄5年(1692)盲人としては最高の関東総検校に任ぜられ、綱吉の命を受け鍼治講習所を開き、門下生を指導した。彼は本所一つ目に屋敷を与えられ、邸内に江の島弁天を祀った。元禄7年(1694)ここで没した。現在両国駅付近に江島杉山神社があり、杉山検校頌徳碑と石像が安置されている。

[杉田暉道]

開院百年を迎える 鎌倉の清川病院

新技術で発展、いま地域医療

key. [鎌倉段葛 新技術 地域医療]

ガイド JR鎌倉駅東口下車5分



鎌倉の八幡さまへの道、若宮大路へ向け二の鳥居をくぐるとすぐに、右手に鎌倉彫会館が見えてくる。段葛の中ほどまで行くと会館側に清川病院がある。

この病院を開いたのは広島県出身の清川來吉で、明治18年に医術開業前期試験に、同20年に後期試験に及第している。

明治22年に横須賀線が開通すると、來吉は鎌倉という土地に注目した。2年後に医術開業免状をうけると彼は、雪之下の本陣大石左衛門方に養生所を創立した。そして明治35年7月1日に現在地に鎌倉養生院を開設した。

現院長の正男は四代目である。平成14年(2002)には開院百年を迎えることになる。

この間、明治・大正・昭和と医療の発展と共に清川病院は歩いて来た。二代目渉は人工

太陽灯やレントゲン、人工気胸器等を導入した。三代目謹三は病院の法人化に努力すると共に、結核中心の病院から外科、整形外科、脳神経外科、眼科を平成3年に併設して地域医療の将来をふまえた体制に作り変えた。また昭和54年より62年まで神奈川県医師会長をつとめ、県下の医政を指導したが残念なことに平成11年8月29日、85才で逝去された。謹三は歴史にも関心深く、平成5年に『清川病院史』を出版した。単なる個人病院の歴史にとどまることなく、鎌倉と医人のつながりにも言及しており興味つきない内容となっている。また前田青邨画伯の作品「腑分け」の下絵を所蔵しており趣味の広さがうかがえる。

〔中西淳朗〕



良忠と看病用心鈔

わが国最初のターミナル・ケアの看護書

key

[鎌倉時代 光明寺 かな書の看護書]

ガイド

鎌倉市材木座6-17 光明寺

JR鎌倉駅東口下車、バス小坪経由返子行光明寺下車



鎌倉時代の名僧で光明寺を開いた浄土宗第三祖良忠(1199~1287)は、1240年ごろにわが国最初のターミナル・ケアのためのかな書きによる『看病用心鈔』を編述した。そこには、仏教精神の「慈悲心」に基いた看病人のための臨終心得が具体的に示されている。とくに延命よりも苦痛の緩和が末期医療では重要であることを強調していることは、今日からみても卓見である。

良忠は没後の永仁元年(1293)に伏見天皇より「記主禪師」の謚名を賜わり、浄土宗第三祖の大徳と呼ばれている。彼は石見国の上三隅町に正治元年(1199)に生まれ、執権・北条経

時の外護を受けて鎌倉・佐助ヶ谷辺りに蓮華寺を創建した。寛元元年(1243)にこれを現在の材木座の地に移し、(大本山)光明寺と改めた。さらに東国における浄土宗の布教に尽力し、弘安10年(1287)に89才の高齢で入滅した。その墓は老明寺の裏山・天照山の麓に眠っている。

『看病用心鈔』の内容をみると、序文では患者は看病人を仏と想い、看病人は患者をわが子と想うよう説いている。ついで19か条の項目についてそれぞれ要旨を述べると次のようである。第1条、患者の部屋は荘厳にして仏像を安置すること。第2条、患者の部屋を荘厳にし、看病人は患者の様子を見逃さずに正しく把握すること。第3条、酒肉などを食した人、妻子も近づけないこと。第4条、看病人は3人がよい。第5条、医療は苦痛緩和のためにあること。第6条、患者を妄念を起させないようにし、往生への援助をする。第7条、魚に執着せず、念仏を勧める。第8条、遺言を求めない。第9・10条、患者が苦しければ排泄を自由にさせる。第11~19条は患者が念仏を唱え易くするために、いろいろな場合での唱え方を詳しく指導している。

〔杉田暉道〕

ベルツ碑

日本内科学会の恩人

Key

[葉山愛好者 温泉研究 日独のかけ橋]

ガイド

JR逗子駅下車、海岸廻り葉山行バス森戸神社前下車



ベルツErwin Balz (1849 ~ 1913) は東京大学医学部内科の教師として1876年来日以來26年間1902年まで勤務した日本医学会の恩人である。彼は病理学、伝染病学、寄生虫学のほか内科一般、衛生学、栄養学、人類学など極めて幅広い研究をした。また温泉医学にも関心が深く、伊香保、草津、箱根、熱海などを訪ね、温泉の調査研究をして『日本鉱泉論』を刊行した。伊香保と草津にはベルツの碑や胸像が多数見られる。

ベルツは荒井花子と結婚、東大退職後、宮内省御用係りとなった。その後も日独間を往復したが、1913年故国で死去した。

葉山海岸を訪ね、森戸神社に入ると海を背にしたところにベルツ碑が建っている。この碑は彼の業績を記したものではなく、葉山が避暑にも、避寒にも好適な健康地であること

を提唱したものである。碑文の内容を紹介すると、明治20年東京駐在のイタリー公使レナード・マルティーノ氏が健康地葉山に別荘を建てた。その後ベルツも葉山海岸に別荘を建てて衛生学的見地から見ても理想郷であると提唱した。明治22年には鉄道も開設され、井上子爵、菌子伯爵もこの地を好まれた。有栖川宮家の別邸も建てられ、明治27年には葉山に御用邸が置かれるようになった。葉山がこのように発達を遂げたのはマルティーノ公使とベルツ先生のお陰であると感謝を述べた言葉である。

撰文は東大名譽教授入沢達吉で、この碑の除幕式は葉山開設五十周年に当る昭和十一年四月四日、日伊独、三国旗の飾られた中で、イタリー大使、ドイツ大使、ベルツ花未亡人、真鍋喜一郎、富士川游ら多数参加の下に行われたということである。〔大滝紀雄〕

横浜市金沢区の医師たち

key [地域医療 幕末明治初期 嗅療法]

ガイド

全龍禅院...京急金沢八景駅下車。
 国道16号で南に向い左側。徒歩3分
 田中病院跡...全龍禅院の先、六浦橋陸橋を右に
 曲り、上行寺左隣。徒歩5分
 東漸寺...京急杉田駅下車。
 商店街を東に向い左側。徒歩5分



(写真1)

金沢区は横浜市の南端で、明治40年代に磯子区間にトンネルが開通するまで、横浜とは主に船を利用していた。

当時の医師達の資料は皆無に等しかった。六浦の田中病院が200年も続く医家であったことを、町の古老のみ知るところであって、三十数年前に惜しくも閉院された。墓は鎌倉靈園にある(写真1)。

金沢区図書館発行の「金沢の100年」や、横浜開港資料館の古文書より、田中氏族の他に、金沢藩の藩医であった宮川一宗氏と佐藤忠蔵氏の2名が、廃藩後、金沢の村医となり、磯子に開業していた漢方医・間辺魯山氏(明治20年後半没)墓は東漸寺)が金沢の北部富岡地区を主に往診していたことが判明した。田中玄悦氏(明30年前半没)は長崎で、宮川氏(明30年後半没)は京で、夫々蘭学を学んだ蘭方医

である。宮川氏は晩年まで医業を行っていたが、佐藤氏は廃藩後は漢方医であったが医業を行わず、村民に漢学を教え、また文人として一生を村の教育に捧げた。「県北東医史跡めぐり・都筑の村の医師たち」に出てくる佐藤文成氏の次男である。墓は宮川氏と同じ全龍禅寺にある。(写真2)

田中病院は、明治・大正・昭和初期にかけて、梅毒病院として関東一円でも有名であった。殊に嗅療法(梅毒の水銀の燻煙療法的一种)は、幕末時代で廃れたと思われていたのが、大正時代まで、この病院に存在していたことが、医史学会員・中西淳郎氏(鶴見区)の追跡研究により、明きらかとなった。

〔松本龍二〕



(写真2)